



福島再生：子供たちのために

Recover of Happiness for the Children in Fukushima

西本 由美子、吉田 憲一
(NPO 法人 ハッピーロードネット)

I and Fukushima Happy Load net members visited Ukraine to survey the wonderful city, Slavutychny on September 23. After that we visited the Research Center for Radiation Medicine of the National Academy of Medical Sciences of Ukraine, National University of Life and Environmental Science of Ukraine, and Chernobyl Museum. The recovery of environment and care of heart of people were good in Ukraine. We learned a lot of things and we had a strong confident to recover of happiness for the children in Fukushima. We have decided to do whatever we should do for the children in Fukushima by realize the wonderful city named Sakura Town.

Key Words: Chernobyl, Sever Accidents, Decontamination, Agriculture, Slavutychny, Recover, Children

1. 緒言

私たちは9月21日に日本を発ち、22日から24日の3日間に渡り、駐日ウクライナ大使館のご支援を得てチェルノブイリ原発事故以降の放射能問題を始めとする街の復興の現場を勉強すべく視察に訪れました。この視察のきっかけはIAEA,NEA第7代ISO議長と同苛酷事故対応委員会議長の水町渉先生、北海道大学の奈良林教授のウクライナの復興事例を福島で講演いただいたことです。

特にチェルノブイリの原発事故から2年足らずでニュータウンを建設して、人々が幸せを取り戻した夢の街スラブチッチ市の復興の実例が福島でも実現したいと考えました。希望者を募ったところ、自費での参加ですが、約30名の視察団になりました。構成メンバーは、北海道大学 奈良林 直教授、水町 渉氏、NPO法人ハッピーロードネットメンバー・福島県浜通りの青年会議所メンバーが中心です。見学先は図1に示すチェルノブイリ原発をはじめゴーストタウンとなったプリピャチ市、夢の街スラブチッチ市など盛りだくさんの視察でした。中でも特に気になったのが、原発事故から2年で完成したスラブチッチの新しい街には驚きました。当初は原発作業員の住まいとして造られたようですが、今では子供から大人まで平和に楽しく生活しているように見えました。当時、社会主義国家だったからできたのかもしれませんが、日本も見習うべきこともあるのではないかと感じました。とてもいい経験をさせていただきました。



Fig.1 Map showing Chernobyl and Kiev in Ukraine

たセルゲイ・ミールヌイ氏の講話そして現地の避難されている方で組織している NGO との懇談会に出席させて頂きました。チャルノブイリ発電所で働いている人々が住んでいたプリピャチ市やチェルノブイリ市にいて家族も含めて被曝し、辛酸を舐めて心に傷を持つ人々が集まってお茶を飲みながら世間話をしたりして心のケアをしている民間組織です。90年に「ウクライナでの原子力発電所の建設凍結」を決議し、事故後5年経った91年に独立して全原発停止しました。停電が何度も発生して向上の操業率が落ちて経済が破綻し、失業や将来の展望が見えないなかで鬱やアル中などにより、自殺が急増したとのことです。チェルノブイリ原発の被災者はキエフ市の住宅に優先的に入居できましたが、それをねたまれて小学生の子供が学校で上着を缺で切り裂かれるなどのいじめにあったなど、当時の苦しいお話もお聞きました。福島の仮設住宅に住んでいる方たちと状況が似ていることに驚きました。



Fig.2 Non government organization "Zemrakh"

2. NGO 組織「ゼムリャキ」の心のケア

初日は、チェルノブイリ事故後の様々な調査活動を行っ

3. セルゲイ・ミールヌイ氏の講演

まずは、セルゲイ、ミールヌイ氏の講演の記録をお伝えします。セルゲイ、ミールヌイ氏は、チェルノブイリの事故以来、線量測定や研究をして来た第一人者です。Liveforceという本を2008に出版。世界に原子炉があることも事故があることも事実という事を描いた生き残る為のガイドブックを書いておられます。



Fig.3 Sergii Mirnyi's presentation "Radiation accident: Survive - understand - overcome".

福島原発事故の規模はチェルノブイリの数千分の1程度。被害はローカルな影響だが、チェルノブイリと同様。健康被害を受けるのは、福島から離れたところであり、放射性物質的なものより社会影響が大きいからと解説されました。例えの一つとして地震を例にとって説明する。ハイチ地震316000-100000人の被害とも言われるチリ地震。500倍の揺れ。もっとも酷い地震だが、被害者は550人で済んだ。建物の倒壊によるためなので、チリの方は建物地震に対応していた。地震はどちらも天災だが、被害は自然による被害より人間による被害の方が大きい中で、原発事故の場合、人による部分が大きい。

チェルノブイリ原発事故直後から様々放射線測定してきた。当時は軍隊の車に乗って様々な地域の測量し、壊れた原子炉の数百メートルのところにも行き計測を行った。

そんな中、そしていくつかの結論に達した。被害は狭い範囲に集中していた。我々専門家は数値で見るが、数値をみると、汚染マップでも赤とピンクで数百倍の違いがあった。汚染源から離れれば離れるほど急激に数値が減る。

ヨーロッパの、汚染のマップで説明する。黄色いところ、ベラルーシにもオーストリアにもあるが、数千キロ離れているのに一緒の扱い。1と10の間が2もあれば5という地域もある同じ汚染地域の中でも数値の違いがある。カシパロフ先生の引用では、ストロンチウムの50パーセントは汚染地域の2パーセントに集中している。

チェルノブイリと福島を比較すると、エリアの距離尺度を合わせ、汚染度も合わせると、福島は極めて小さい。放射能事故の影響も、チェルノブイリと比較すると極めて小さい。放射性物質除去のスピードは早ければ早いほど小さくなる。濃度の高いものは半減期も短い。そんな中、

チェルノブイリは1年以内で1/10に放射線量が下がった。そして37年経過した現在は1/10000まで低下している。自然の半減期の数値も除染によるものもある。結果、チェルノブイリの除染は効果的だったと言えるだろう。

それよりも精神的、社会的な影響の方が大きかった。避難対象区域の設定による移住の拡大。エリア選定のミス、健康被害調査のミス、優遇入居、賠償制度の問題点もあった。

福島では、事故の一年後には十分許容値以内になっていた飯館。0.16マイクロで避難を行った。我々の感覚からすれば、実際の被害に対して過剰な反応と考えている。

放射能の一番大きな被害は一般国民に対してのもの。人間が放射能を恐れるのは見えないから。何処にでもあるという状況だと余計に恐怖心が出る。放射能=命を落とすという印象が拭えない。人間が簡単に乗り越えられるという意識が希薄。三つの要素は、①目で見えない、②簡単に測定できる。③強い放射能は人を殺す。このため、放射能は普通の人にとって恐ろしいという物になってしまっている。汚染のレベルが低くても過剰な反応が出て政府も過剰な反応を示す。過剰な反応がさらに過剰な反応を生む負の連鎖を生んだ。放射能を知識が乏しいために作り話や噂が過剰な反応を生み、精神的な被害が健康被害を生んでいる。もちろん高い放射能による被害は危険だが、低線量は危険でもないのに過剰な反応を生んでしまっている。

個人的な経験からも、長い研究結果からも、一番の被害は情報被害、情報ハザード。ウクライナでは個人の健康の被害になったのは、事故後の健康診断など過剰な結果によるストレスでかえって健康被害を負った。おかしい話だが、賠償や健康被害を受けた人しか賠償を受けられないという状況。病気になった方が得なので、自分は病気であるという気持ちになってしまった。ほとんどの保険制度の欠陥だが、放射能被害はなおさら。今回のプレゼンの目的は・・・。いろいろな話を聞くことになるが、正反対の情報を聞いた時に客観的に聞くことができるようになるほど、知識をつけるべき。強い見解が述べられた。放射能による事故より、情報による被害の方が深刻。マスメディアによる過剰な情報がさまざまな被害に繋がっている。

現在福島県内では多額の費用をかけて除染を行っているが、効果がない。費用的にもっと少ない情報除染を行うべきである。放射能被害は人間にとって百年程度の新しい被害。生物学上の不備、社会的な影響、精神的な影響も大きい。作り話のデマもおおきい。放射能と直面するようになったために、改革しなければならない。

ウクライナではチェルノブイリツアーという会社を作って様々な教育ツアーを行っている。明日一日の視察で、線量計で実査に回り、多少違った視点から見る気とができる。

放射能汚染環境で生きるという設え精神的なハードルを乗り越えるための知識を教えている。一番重要なのは観光客のそばには、生き残った者がいること。この本、日本語に訳されているが、何故かまだ出版されていない。チェ

ルノブイリ事故を生き残った人を連れて行き、体験談を話、情報を与えている。ウクライナとの政府機関同士の連携は進んできているが、民間で進んでいないことが残念。個人的な活動として福島大学に行き作家として活動して見たいと思っている。事故の前線で戦ったものとして学生に伝える。被災地の集団とあって伝えたい。生き残ることが出来るということを伝えたい。福島テレビと接触して一連のシリーズとして番組に参加できれば、被災地の新しい知識、新しい生活に繋がれば。コストの高い対策が意味がない。それよりも遥かに効果的。関心を持っているパートナーを増やしたい。世界的なプロジェクトではないが、サポートがあれば出来る。情報を必要としている人に伝えることができる。正しい知識は不可欠だ。ただし知識は理解なしには意味がない事だ。

4. チェルノブイリ原発とプリピャチ市

視察2日目は、チェルノブイリ原発とプリピャチ市。チェルノブイリ原発事故による影響で避難を余儀無くされたプリピャチ市。現在は原発事故の影響でゴーストタウンと化している。ここはチェルノブイリ原発から3km程度。福島第一原発と大きく違うのは、拡散した放射線量。福島の100倍以上の放射性物質の拡散があった事になるらしい。



Fig.4 Pripyat-town

ここの住民は、除染するので3日間だけ避難してくれと言われたまま、戻れない状況になっているとの事。ここには当時53000人の住民が生活をしており、主たる産業は原発。原発の建設のために街が造られ、遊園地やホテルなどが築かれ、子どもたちも生活していた。事故後、親戚宅を点々とし国が準備した「夢の街スラブチッチ」へ移住した世帯。放射線を恐れてキエフやベラルーシなど低線量の周辺都市に暮らすようになった世帯など、様々だったようだ。

事故後、高い放射線量を浴びた住民の中には、様々な健康被害や胎児への影響が出たようだ。ただし胎児や子どもに影響が出たのは、チェルノブイリならではの「高い放射線量」だったから。チェルノブイリの場合、避難した人は200ミリシーベルト以上の外部被曝と、200ミリシーベルト以上の内部被曝があったからで、福島の例とは比較出来ない程のものだった。



Fig.5 Chernobyl-Unit 4, New Safe Confinement ("ARCH")

図5は、チェルノブイリ原発の石棺を覆うアーチと呼ばれる高さ110mの巨大な鉄骨構造物である。組立が完了するとレールで移動して、石棺の真上に設置される。上部にクレーンなどの設備があり、原発の廃炉作業にとりかかる。福島第一原発よりも25年先に起こった原発事故であるが、廃炉はほぼ同時に行われることになる。

現在の福島の状況と置き換えて見る。放射線量のレベルが全く違うのに対し、福島第一原発周辺地域でのゴーストタウン化が進み時間だけが流れ現在に至る。汚染のレベルが低くても過剰な反応が出て政府も過剰な反応を示す。汚染水の問題などが更に拍車をかけ、過剰な反応がさらに過剰な反応を生む負の連鎖を産んでいる。もちろん高い放射能による被害は危険だが、福島の低線量は危険でもないのに過剰な反応を生んでしまっている。

チェルノブイリの長い研究結果からも一番の被害は情報被害。放射能の事故による知識不足故の情報による被害。更にはマスメディアによる情報被害に繋がっている。

政府は多額の税金を投入し除線作業を行い、それ自体を安全の基準の一つとして捉えているようだが費用対効果は薄い。農産物に関しても全て検査を行い、本来であれば「福島県産」が世界で一番安全なものであるはずだが、出だしの

イメージから脱する事はできていない。

正しい情報の尺度の周知という情報除染（心の除線）を効果的に行っただけで、地域住民更には国民の意識・認識を変えていかなければ、復興の重要な一つの要素である市民意識レベルでの不満解消にはつながらないのではないだろうか。

5. スラブチッチ市

チェルノブイリ事故の直後には、これは福島でも同様であるが、大勢の作業員が必要であった。その宿舎として仮設住宅や遊覧船などを使っていたが、ウクライナでは新しい町作りを計画した。新しい町を作るなら、理想的なおとぎの国、夢の町をコンセプトにニュータウンを作ることに決定した。チェルノブイリの東約 50 km の所に夢の町の建設が始まり、なんと事故後、1年8ヶ月で2万4千人が住める夢のニュータウンが完成し、最初は作業員の家族が住み生活を始めた。

図6のように。チェルノブイリ原発からは鉄道でスラブチッチ市に移動した。車で行く途中にベラルーシの国境があり、入出国手続きがあり、煩雑なためである。現在も 24,700 人の普通の人々が幸せに暮らしている。スラブチッチ市に到着して、すぐに市庁舎に向かった。市長とのミーティングには亀岡復興政務官にもご出席いただいた（図7）。市の歴史や毎週月曜日に欠かさず行っている市民との対話会など、住民の要望を入れて市の行政を改善していく姿勢に市長のリーダーシップと、明るく幸せそうな町の雰囲気の原因が分かった。町の内側は、図8のようなアパートであるが、その外側に1戸建ての庭付きの家がならんでいる。子供が3人以上の家庭は庭付きの一戸建て住宅に入居できる。街中ではあちこちで子供たちの遊ぶ姿や図9のように、ベビーカーを押す家族の笑顔が見られた。



Fig.6 Transfer from Semikhody railway station to Slavutych-town



Fig.7 Meeting at the town-hall with the Slavutych-town mayor



Fig.8 Apartment house in Slavutych-town



Fig.9 A happy life in Slavutych-town

5. 結言

視察を行って得られた成果をまとめます。第1はチェルノブイリ事故と福島の原発事故を比較すると、福島の事故の影響は極めて小さいという事。第2はメディアを含め個人に至るまで、より専門的な知見からの正確な情報が広がる前に、誤った知識が広まってしまった事。そして第3は、問題をより深刻に深刻にと捉えている事自体、精神的に追い詰めている事が一番の悲劇だという事が痛いほど理解出来ました。大規模な除染をする前に、まずは私達の精神的な除染をしないと一言が凄く印象的でした。本当に人生でこんなに多く勉強したのは初めてと思うほど、濃密な3日間でした。夢の街スラブチッチ。本当に素晴らしい街でした。この充実した旅で学んだのは、私たちは放射線に対する正しい知識を持たなければならないということ。今の日本の放射線に対する情報は、偏見に満ちていること。正しい知識を持って行動すれば、福島第一原発さえ安定していれば、私たちの故郷は何の不自由もなく安心して住めると言うこと。本当に多くのことを学びました。最後に、ウクライナ視察団の団長としてご尽力いただいた水町渉先生が10月28日に亡くなられたことに対し、感謝しきれないほどのお礼の気持ちを込めてお悔やみを申し上げます。福島の再生のために、子供たちが家族とともに幸せに暮らせる桜の街をぜひ実現したいと思います。